

『法思想史』

(公務員・20代・Y.Y)

法思想史との出会いは、大学生の時に遡る。私は、何となく面白そうだった法思想史ゼミに所属し、民主主義の歴史についてゼミ論を書いた。確か、アリストテレスから始まって、カントやヘーゲル、そしてケルゼン、ハートといった思想家たちについて学んだ。民主主義ひとつをとっても、思想家によって、様々な角度からの考察がなされており、多くの価値観に触れられることが、法思想史の醍醐味だった。

本書を読めば、時代とともにあった法思想史の発展を感じることができるだろう。また、本書は、現代の諸課題(環境問題や世界平和、ジェンダー、LGBT)に対して、多面的な角度から考えを巡らせることの大切さを教えてくれる。現代の諸課題を解決していく方法は、ただひとつとは限らないのだという発想を与えてくれる。

内容としては、時代順に主要な思想家が紹介されており、高校時代の倫理の教科書にもう一步踏み込んだ感じであるが、深くまで述べられていない点が取っつきやすく、スラスラと読める。ある思想家について、もっと知りたいと思ったら、末尾に参考図書も豊富に紹介されており、興味をひくものであった。

法律を学んでいる学生さんから、社会人の方まで、法思想史は一度はまるとやみつきになる領域だとおすすすめしたい。

『法学教室』2020年4月号(No.475)掲載「Reader's Voice」より